

## 館 潔彦(たて きよひこ)について

西羽 晃

桑高の北の方に照源寺がある。桑名藩主松平（久松）家の菩提寺として有名な寺で、伽藍は戦災を免れて、格式あるたたずまいを残している。その墓地に桑名藩出身の柳本家と館（館）家の墓が並んで建っている。館潔彦の妻は十手（そで・柳本通義の姉）であり両家は姻戚である。館（たて）家は本来は「館」であったが、1945（昭和 20）年の空襲で桑名市役所が焼けた戸籍簿を復活させる際に、「館」と書き誤ったので、そのまま「館」が正式な苗字になったという。

館潔彦は嘉永 2（1849）年に桑名の新地で生まれた下級武士であった。明治元（1868）年の戊辰戦争の時の彼の動きは不詳だが、明治 5 年に東京の工部省測量司（のち内務省、陸軍参謀本部陸地測量部を経て、現在の国土地理院）に就職した。そして彼は測量技師として日本全国を歩いて三角測量を行って、近代地図作成に尽力した。

明治 21 年 5 月 17 日付けで「陸軍参謀本部陸地測量部班長心得、陸軍六等技師」の辞令を貰っている。24 年に一等三角点撰定官となり、千島列島から九州までを歩いて測量し、日本全国の一等三角点のうち 25%ほどを彼が撰定したと言われる。日本アルプスの山々を踏破して、近代的な登山として初登頂した山々多い。彼は水彩画を得意とし、登山風景を多く描き残している。鳥打帽に洋服、脚絆、わらじ履きで、腰に麻縄、肩に望遠鏡をさげ、洋傘を杖かわりに持って、案内役を連れて登山したようだ。測量道具などを持つ荷持ちも大勢従っていただろう。



照源寺にある館（館）墓地

明治 36 年 1 月 28 日、潔彦は突然に休職を命じられた。理由は不詳である。39 年 11 月に休職期間が終わり、退官となった。翌々年妻の「十手」が亡くなり、桑名の照源寺に墓を設けた。晩年の潔彦は義弟の柳本通義の斡旋で桑名・尾野山の丘陵地に家を建てて住んだ。南は諸戸水道貯水池であり、西には諸戸家の墓地があり、北には天理教の教会があった。諸戸徳成邸や桑名中学（今の桑高）が出来る少し前かと思われる。

ここで悠々自適の生活を行っていたが、昭和 2（1927）年 6 月 4 日自宅で庭の草取りをしていて、突然に倒れ、永眠した。享年 78 歳だった。照源寺に妻とともに葬られた。

潔彦には 3 男・2 女が生まれたが、長男八洲彦は京都帝国大学を出て東洋紡績に勤め、次男の香緑は東京帝国大学を出て三井鉱山に勤め、三男の淳吉は陸軍士官学校を出て、陸軍に入り日露戦争で戦死した。八洲彦の家系は三津彦一登志彦と続き照源寺に墓がある。香緑の長男嘉穂は慈恵医大病院の医師、二男御木男、三男稻麿、四男豊夫はともに東京帝国大学卒業であり、豊夫は三菱自動車の社長を務めた。八洲彦・香緑の家系は、いずれも優秀な学歴の持ち主である。

#### 参考資料

「陸地測量師正七位勲六等館潔彦以下十一名官等陞叙ノ件」他

（国立公文書館所蔵文書）

『はじめての日本アルプス 嘉門次とウェストンと館潔彦と』

（山村基毅著 パジリコ発行 2008 年）

『柳本通義の生涯』（神埜努著 共同文化社発行 1995 年）

『私の履歴書』（館豊夫著 日本経済新聞社発行 1996 年）

『大桑名に輝く人々』（田中宗太郎編輯 大桑名に輝く人々編纂協会 1938 年）